ヨーガとニューソート

——松ヶ岡文庫未整理資料より発見されたバラティの手紙をめぐって

吉永進一

フィリップ・デリップ（Philip Deslippe）

はじめに

現在、ヨーガ、ヴィッパサナー瞑想、スーフィー、禅など、アジア発の心身技法は、世界的に広まっている。身体だけではなく、心、あるいはそれをこえたもの（スピリチュアル）の健康を求めて、多くの人々が実践している。それらは、近代になって進んだ宗教と医学の分化に抗して、身体、心、霊性の全人的な救済を求めてやまない人間的欲求の表れともいえる。とりわけヨーガは広く普及し、美容体操から瞑想まで各種のヨーガ教室が、文字通り世界各地で開催されている。

ところで近年、近代ヨーガについての見直しが進められている。つまり、現在行われているヨーガがどこまで伝統的なものかという問題である。海外のヨーガ研究動向に詳しい伊藤雅之（愛知学院大学）は、以下のように指摘する。

「現在実践されているアーサナの大半は19世紀後半から20世紀前半にかけて西洋で発展した身体文化を強調する運動に由来する。この身体文化は、キリスト教の伝道活動であるYMCAによって、またイギリス陸軍によってインドに輸出された。その後、インドの伝統武術と融合し、インド独自の体系として伝統的な「ハタ・ヨーガ」の名のもとにまとめられた。それが現代のアーサナの起源である。つまり、今日世界的に流行しているヨーガと『ヨーガ・スートラ』に代表される古典ヨーガや中世以降に発達したハタ・ヨーガとの結びつきはきわめて弱いと言えるだろう。」①

近代ヨーガ、少なくともアーサナは近代に西洋からの影響で構築され

たという指摘は非常に興味深い。しかし、さらにつけ加えるならば、ヨーガの近代化、国際化は、このアーサナの発明だけではなく、それ以前から幾重にも重なる過程であった。そもそも、ヨーガはすでに1893年のシカゴ万国宗教会議でのヴィヴェーカナンダの登場によってアメリカに伝えられ、20世紀初頭にはすでにアメリカでヨーガの第一次流行があった。『ハタ・ヨーガ』と題する本も含めて、ヨーガの手引書がいくつも出版され、インドから来たヨーガ教師たちが実際に指導したのである。

さらに、アメリカに来た時点で、すでにヨーガは伝統的なそれではなかった。当時、滞米中であった曹洞宗の学僧、忽滑谷快天は、ヴィヴェーカナンダらのもたらしたヨーガがヴェーダンタとパタンジャリという別の学派を結びつけたもので、伝統的なものではないことを見抜き、以下のように書いている。

「然れども北米の瑜伽は、ヴェダンタの粋を抜き、之にパタンジャリの禅定を加味し、更に近世の哲学科学を以て其説明の便に供するものなれば、印度本国の瑜伽哲学と日を同うして論ずべきにあらず」②

この第一次流行において、ヴィヴェーカナンダと並ぶ、あるいは一般への影響力の点ではそれ以上に重要な、もう一人の中心人物は、ヨギ・ラマチャラカである。彼はヨーガの通信教育を行い、13冊の著書を残し、その多くがロングセラーとなっている。しかし、肖像写真をいくつも残したヴィヴェーカナンダと異なり、ラマチャラカは肖像写真が残されていない。というのは、後述するように、彼はヨーロッパ系アメリカ人であり、ペンネームだけの偽ヨーガ行者、いわばアメリカ自生のヨーガ行者であった。しかし、その著作はアメリカのみならず、日本、ヨーロッパなど世界各地で翻訳出版され、世界各地に最初にヨーガを広めた最大の功労者である。つまり、インドの近代ヨーガとアメリカ自生ヨーガの両輪が、第1次ヨーガ流行の原動力であった。

ここで連想されるのは、日本仏教のアメリカへの伝播であろう。仏教は19世紀末までには、印刷物でテキストは伝わっていたが、そのテキストをどう宗教的に（つまり、各人の実存に関わる形で）意味あるものとして理解すべきかは分からなかった。19世紀末、この空白を埋め、主体的、実践的な解釈を試みたアメリカ人が何名かいる。たとえば、スウェーデンボルグ主義者であったヴェッターリンクは、スウェーデンボルグ思想を仏教に重ねて読み込むことで、その意義を理解している。神智

学は、西洋秘教思想を結びつけ、ポール・ケイラスは倫理修養を仏教に読み込もうとした。いわば、東洋からの本格的な仏教到来以前に、アメリカ自生の「仏教」が存在し、19世紀末の第一次仏教ブームを支えていたのである。ヨーガと異なり、言語の壁に阻まれて、アメリカで活躍できた日本人仏教者は平井金三、釈宗演、鈴木大拙、忽滑谷快天らにとどまるが、ヨーガと同様、アメリカ自生の仏教と日本仏教者の両輪があったと考えられる。しかも、それらのアメリカ「仏教」は、神智学は古河老川、ケイラスは鈴木大拙、ダーサは反省会などを通じて、近代化する日本仏教の一部に影響を及ぼしている。アメリカ自生の仏教と日本近代仏教は、似て非なるものにせよ、対話や交流を可能にしたものは、似て非なるものの存在であった③。ヨーガの場合も、アメリカ自生のヨーガとインドの近代ヨーガという、似て非なるヨーガが存在し、しかもそれらの間に交流があったことは後述したい。

さて、以上のような図式を想定した上で、それではラマチャラカを生み出し、インド人ヨギを希求した宗教的文化はどのようなものであったのかという問題が残る。つまりヨーガの受容は、アメリカ宗教史のどこに位置付けられるのかという問題である。

先に引用した忽滑谷快天は、アメリカの自由競争社会、思想の混乱の中で、ヨーガは、クリスチャン・サイエンス、ニューソートと共に、精神主義の新しい潮流を構成して人気を集めていると指摘し、それが禅に通じるものがあると次のように賞賛している。

「瑜伽宗は『新思想』又はクリスチアン、サイエンスに比して一層深刻にして透徹せる哲理を含むもの、其実行の方法は殆ど禅と同一にして、端座静慮を専らとし、三昧に住して寂定の中に梵と合一するの法門」④であり、「瑜伽は一種の外道禅にして、如来正傳の清浄禅にあらざるも、我禅法の先駆として、北米の野に其の驥足を伸ぶるは吾人の大いに喜ぶところである。」⑤。

あるいは、クリスチャン・サイエンスについては、鈴木大拙も「仏教哲理を米国風にプラグマチックに活用させると、「クリスチャン・サイエンス」にならなくてはならぬのである」⑥と賞賛している。大拙らしい要約でその教義を紹介しておくと、以下のようなものである。

「『サイエンス』の名が一寸をかしくも思われる。併しこれは科学と云う義ではない。『知識』と解して可い。『知識と健康』と云うのが、該教徒の聖典である。何を知識するかと尋ぬるに、それは『霊は一切であっ

て物は無なり』と云うことを知識するのである。知識と云うはつまり迷信や盲信に対してのことである。悪は物を実在と見るから来る、物が始めからないのであるから悪は本来無だ、神は霊である、霊は万徳円満の実法であるから、此霊を体得すれば万徳悉く吾に備わる。否、吾は本来から霊なので、何等の不足も始めからない」⑦

このように、忽滑谷快天だけでなく鈴木大拙の目からしても、「物質は精神の産物」「我々は霊である」とするクリスチャン・サイエンスの唯心論思想（これはニューソートにも共通）は、東洋思想全般に親和的であるように見えたのである。

ニューソート、クリスチャン・サイエンスはヨーガや東洋思想につながるものがあると二人の仏教者がここで見抜いているが、後述するように、ラマチャラカはこのニューソートの著述家の一人であり、インド人グルを歓迎したビアトリスはニューソート、クリスチャン・サイエンスの信奉者であった。つまり、19 世紀アメリカの霊的文化のひとつであり、ポジティブシンキングなどの形で、現代に至るまで「アメリカ人気質」を形づくってきたニューソート文化が、ヨーガを受け入れる素地を作ったのである。ラマチャラカのヨーガがロングセラーとなっているのは、単なるフェイクではなく、その文化を反映しているからである。

以上、前置きが長くなったが、このような歴史的視点からすれば、松ヶ岡文庫に残された、ヨーガ関係の資料は重要性を帯びてくる。文庫には、19 世紀末から 20 世紀初頭アメリカで出版されたヒンズー教やヨーガ関係の冊子、単行本、通信講座が大量に保存されているだけでなく、同時期のニューソート、クリスチャン・サイエンス関係の雑誌、図書類、読書ノートが残されており、今後それらを調査することで、ニューソート文化に属するアメリカ人女性がどのような思想遍歴でヨーガと出会ったのかを詳細に追跡することができよう。とはいえ、それを正確に評価するためには、ビアトリスとその母エマの伝記と精神史を研究する必要があり、一朝一夕にはいかない。

そこで本報告では、今回発見された資料に依拠して、より限られたテーマをとりあげる。つまり松ヶ岡文庫から発見されたプレムナンダ・ババ・バラティ（Premnanda Baba Bharati）というインド人ヨーガ教師からビアトリスへ宛てた 1903 年 9 月 4 日付けの手紙に焦点を当てる。これは、近代ヨーガ史研究にとっては、いささか驚くべき内容を含んでいるのだが、その重要性を理解いただくために、まずヨーガの出現を用意し

たニューソート文化について触れた上で、ラマチャラカとバラティについて紹介し、アメリカ自生のヨーガ行者とインド人グルが邂逅した場が、雑多な霊的知識の蝟集する場であったということを論じたい。本報告の分担は、「はじめに」「1　ニューソート・アマルガム」が吉永、「2　歴史の中のラマチャラカ」は吉永とデリップ、「3　ババ・バラティ」はデリップ、「おわりに」は吉永が担当し、デリップの英語は吉永が和訳した。

1　ニューソート・アマルガム

アメリカ東海岸の宗教史を概観すると、19世紀初めまで支配的であった神中心の厳格なカルヴィニスト宗教文化が、19世紀半ばから次第にやわらぎ、人間中心、進歩主義の風潮へと変化している。ボストン周辺では、ラルフ・ウォルド・エマソンが人間の神性を強調し、超絶主義運動を開始している。これに続いて、催眠治療師フィニアス・P・クインビーに始まる運動がある。彼は治療の過程で、誤った精神状態が病気を起こすこと、神の知恵を知れば病は治ることを発見し、その発見は、クリスチャン・サイエンスを興すメアリ・ベイカー・エディ、あるいはニューソートの著述家となるウォレン・フェルト・エヴァンズなどに引き継がれていき、19世紀末からマインド・キュア（あるいはニューソート）と呼ばれる宗教的な精神療法運動の大流行となった。クリスチャン・サイエンスのように一個の新宗教を建てるものと、それ以外のさまざまな治療者や運動を区別して後者をニューソートと呼ぶことが多いが、いずれも、精神による治病、人間の霊性の強調、無限の存在と個人の霊とのつながりなどの前提は共通する。

この運動については、ウィリアム・ジェイムズは『宗教的経験の諸相』で「健康な心」という一章を割き、高く評価しているが、そこで彼は、マインド・キュア理論の源として、四福音書、エマーソンの超絶主義、バークレーの観念論、スピリチュアリズムの法、進歩、発達という概念、科学的進化論の楽観主義、そしてヒンズー教をあげている。

さて、19世紀アメリカの霊的思想は、通常、死者霊との交流を実践するスピリチュアリズム、生者の魔術的能力の開発をうたうオカルティズム、西洋オカルティズムと東洋思想を折衷した神智学、精神力による

治病を実践するニューソートは、互いに対立しあう運動として区別される。その中で、ニューソートは、オカルト現象を批判し、哲学的、知的で進歩的というイメージで捉えられてきた。確かに、拠点となった19世紀ボストン地域では、ニューソートが、超絶主義の伝統を引き継ぎ、大学教育を受けた女性に支えられ、進歩的で社会改革的運動であり、ジェイムズもその方向で理解していた。

とはいえ、キリスト教と結びついたクリスチャン・サイエンスを別として、「ニューソート」と総称される宗教文化は、かなり多様なものを含んでいた。その点について、かなり突っ込んだ議論を行った論文が、ジョン・パトリック・ドゥブニー「人間とは今ここにいる霊なり：19世紀スピリチュアリズムの二つの側面と魔術的オカルト的神智学的ニューソート・アマルガムの創造」⑧である。その中で、著者は、ニューソートは実際はより魔術的で大衆的なものではなかったのかと問題提起している。ニューソートの歴史が「歴史家と組織の犠牲となってきた。彼らは、より興味深い（しかしより見苦しい）運動の裏面を、その歴史から切り取り、無害なものにし、最小限にしてきた」⑨と批判する。そもそもニューソートを、ジェイムズのいうマインド・キュア論と、エマソンの流れを汲む超絶主義的なキリスト教的神に限ってしまう純粋主義的ニューソート史観は歴史的に間違いであり、決して「純粋な」マインド・キュア運動はアメリカには存在しなかった。ニューソートは、その発端から、さまざまな要素を含んでいた。彼はその傍証として、ウォレン・フェルト・エヴァンズの *The PrimitiveMind-Cure*（1885）という、初期ニューソートの重要な著作をとりあげ、そこにはバークレーの観念論哲学、エマソン、シェリング、フィヒテのドイツ哲学だけでなく、カバラ、スウェーデンボルグ、オカルティストのエリファス・レヴィなど、東洋と西洋のオカルト的知識がつめこまれていたと指摘する。そして、1880年代末までに、スピリチュアリスト、ニューソート、オカルティスト、神智学徒たちは、人間の霊的能力、精神と大精神あるいは大霊との一致、神秘的東洋に保存されている太古の叡智の存在といった信念を共有するようになり、それまでの敵対関係から、相互に思想の貸借を行うようになり、ひとつのアマルガムに融合し始める。20世紀に入ると、ニューソートの拠点はボストンから南カリフォルニアなどの他地域に移っていき、さらに商業化、大衆化していく。20世紀前半に出版されたニューソート雑誌（*The Magazine of Mysteries*, *The Swastika*, *Eternal*

Progress, *Freedom*, *Unity*, *The Nautilus*, *Success*, *New Thought*）は、前世紀のスピリチュアリズム雑誌、ニューソート雑誌と比較して桁違いに出版部数を伸ばしているが、誌面にはニューソートだけでなく、魔術、神秘、オカルティズム、精神療法、自己啓発などの記事が並んでいた。このように、大衆の嗜好に合わせて、さらなる折衷が進んだ状態をアマルガム・ニューソート（あるいはメタフィジカル・アマルガム）とドゥブニーは呼ぶ。「メタフィジカル」とは20世紀に入って流布した用語で、このようなアマルガム的な雑多な霊的思想の総称である。

興味深いことに、ドゥブニーのいうアマルガムが形成されつつあった20世紀初頭、仏教は退潮し、ヨーガはむしろ隆盛に向かった。その理由のひとつに、ヨーガは、このアマルガムの一部であったということはあるだろう（忽滑谷の指摘を参照）。次に、ヨーガをアマルガムの一部として構築したラマチャラカの歴史的功績について論じておこう。

2　歴史の中のラマチャラカ⑩

ラマチャラカ（Ramacharaka）の執筆したヨーガの単行本は、全13冊に上り、その多くが松ヶ岡文庫に所蔵されている。

Yogi Ramacharaka（出版社はいずれも Yogi Publication Society）

1903　*Correspondence Class Course in Yogi Philosophy and Oriental Occultism*
1904　*Fourteen Lessons in Yogi Philosophy and Oriental Occultism*
1904　*The Hindu-Yogi Science of Breath*
1904　*Hatha Yoga, or the Yogi Philosophy of Well-Being*
1906　*A Series of Lessons in Raja Yoga*
1906　*The Science of Psychic Healing*
1907　*The Bhagavad Gita or The Message of the Master*
1907　*The Spirit of the Upanishads or The Aphorisms of the Wise*
1907　*A Series of Lessons in Gnani Yoga*
1907　*A Series of Lessons in Mystic Christianity*
1908　*The Inner Teachings of the Philosophies and Religions of India*

1909　*The Hindu-Yogi System of Practical Water Cure*
1912　*The Life Beyond Death*

以上のように、ラマチャラカの著作は呼吸法などの身体技法だけなく、ウパニシャッドやバガヴァッド・ギータについての著作も含んでおり、インド思想入門の役割も果たしている（前号で引用したように、ビアトリスはバガヴァッド・ギータを読んで東洋思想に興味を持ったと回顧しているが、このラマチャラカ版の可能性はある）。とはいえ、最も読まれたものはヨーガ論であり、20世紀前半、ヨーガの世界的流布に彼の著作ほど貢献したものはないであろう。フランス語、ドイツ語、ロシア語、日本語など、非常に多くの言語に翻訳され、その影響範囲は広い。たとえば、帝政ロシア期に彼の著作が有名な演出家スタニスラフスキーに影響を与えたことは、近年の研究に詳しい⑪。世界中の多くの地域では、インドのヨギが来る前に、ラマチャラカによってヨーガは流布したといっても過言ではない。

このラマチャラカは、本名はウィリアム・ウォーカー・アトキンソン（William Walker Atkinson）（1862-1932）というヨーロッパ系アメリカ人である。生涯アメリカを出ることなく、アトキンソン、ラマチャラカ、あるいはセロン・Q・デュモン（Theron Q. Dumont）、スワミ・パンチャダシ（Swami Panchadasi）などの筆名で、ニューソート関係の著作を百冊以上著した著述家である。そのため、従来「ラマチャラカ」は、専門家には自称ヨーガ行者として軽視されてきた。とはいえ、ヨーガを広く普及させた彼の歴史的功績は、それだけで片付けられるものではない。

アトキンソンの経歴は以下のようなものである。彼はメリーランド州ボルチモアに生まれる。家業の食料品店をつぐ予定であったが、一時期心身不調になり姿を消している。実生活に復帰した彼は神智学にのめりこむ。その後、アメリカ各地を放浪し、職を転々とした後、最終的に1890年代ペンシルヴァニア州で弁護士となる。1900年初頭、職業上のトラブルで再び心身不調に陥り、数週間行方不明になっているが、この間、シカゴの催眠術治療者ハーバート・パーキンに治療を受けている。この治療が機縁となって、アトキンソン自身も催眠術治療家に転身し、1900年秋までにシカゴに移り、*Thought Force* という催眠術書を出版している。その後、*The Journal of Magnetism*（間も無く *New Thought* と改名）の編集者となるが、1904年に共同発行者の不祥事が発覚、アト

キンソンは東海岸からロサンゼルスに移り住む。このロサンゼルス時代に、彼は後述するプレマナンダ・ババ・バラティと知り合い、バラティの編集していた雑誌 *Light of India* にも寄稿している。1907 年にシカゴに戻り、そこから 15 年間シカゴで精力的に執筆活動をする。デュモン名義でセールスマン向けの成功哲学、あるいはアトキンソンの本名でテレパシーなどの超心理関係の著作を発表している。1908 年に Three Initiates の変名で西洋秘教思想とニューソート的実用思想を折衷させた *Kybalion* を出版、1909 年から 11 年にかけては *The Arcane Teachings*、1910 年に *New Thought* の編集者に戻り、 ニューソート著述家のエリザベス・タウンの編集する *Nautilus* にも寄稿している。1916 年から *Advanced Thought* 誌に執筆、1920 年代初頭、デトロイトで *Personal Power* という 12 巻の著作を出版。その後南カリフォルニアに移り、1932 年 11 月 22 日パサデナの自宅で死去している。狭い意味のニューソートだけでなく、世俗的な成功術、超心理研究、さらに東洋と西洋の古代秘教思想など、彼のレパートリーはアマルガムなニューソート全領域をカバーするものであった。

アトキンソンは、ラマチャラカ名義の著作を執筆する上で、神智学、身体修養とセルフヘルプ、そしてニューソートや催眠術の「精神」概念の 3 つの影響を受けていた。

まず、彼はもともと神智学研究から出発している。ラマチャラカ名義の最初の記事は神智学徒メイベル・コリンズの『途上の光』（*Light on the Path*）の紹介文であった（前号の記事に書いたように、ビアトリスが大拙にプレゼントした著作がこれである）。彼は神智学からはヨーガの理論面を借用している。神智学協会の出版する雑誌、単行本はアイデアの源泉であったようで、特に影響力の大きかったものは Rama Prasada, *The Science of Breath and the Philosophy of the Tattvas, or Nature's Finer Forces* (Theosophical Publication Society, 1890) であろう。身体修養 (physical culture) とは、19 世紀後半から流行した健康法を指すが、ラマチャラカのヨーガ行法には、同時代の健康法を借用したものがある。具体的には、技法の一部には、L. Dow Balliett. *The Body Beautiful: According to the Delsartian Philosophy* (Author, 1901) の影響が見られる（さらに言えば、腹式呼吸の利用は、アトキンソンの催眠術の師であるパーキンがすでに行っていた）。それ以上に、簡便な身体訓練という売り出し方自体が、健康法文化の影響下にあった。そして、最後に「精神」の

概念である。催眠術やニューソートにおける、離れた他者と影響し合う精神という概念は、超心理的現象を説明する理論枠組みとなった。ラマチャラカのヨーガ理論では、プラナという万有引力、電気、生命力の本質となるエネルギーが大気中には遍在していて、これによって他者の身体に影響を与えるとされた。この点はヴィヴェーカナンダも同様であり、プラナは宇宙の全能の力であり、蒸気機関も電気もプラナの力により、世界の偉大な預言者はその強大な意志力でプラナを高次の振動にもたらし、それによって世界を動かすと断言している。

形而上的な理論（神智学経由のインド思想）、身体の修養（健康法由来の簡便で有効な技法）、超心理研究（テレパシーなどの超心理現象への疑似科学的説明を与えるプラナ）――ラマチャラカの著作は、このように折衷的な構造物である。しかし、この折衷性のために、読者たちは親近性を感じ、手軽に実践できる入門書として、あるいは東洋思想への入り口として長年にわたって出版され、そして利用され続けてきたのである。

その普及について、ひとつの挿話を紹介すれば、有名な詩人エズラ・パウンドも、その作品の中でラマチャラカの『ハタ・ヨーガ』に言及している。1945年から58年にかけて、精神病院に入院していた時期、毎朝ラマチャラカの呼吸法を実践し、友人には「ヨーガの小さな青い本」（ラマチャラカの著作の装丁）を送り続けていたという。

さらに忘れてはならないことは、ラマチャラカの影響は同時代の日本にも及んでいる。以下のように、翻訳、紹介の点数からすれば、アメリカ生まれの呼吸法としてはずば抜けて多い。

1　忽滑谷快天『養気錬心乃実験』（東亜堂、1913）
2　ラマチャラカ著、松田卯三郎訳『深呼吸強健術』（大学館、1915）［*The Hindu-Yogic Science of Breath*, 1904］
3　ラマチャラカ著、松田霊洋（卯三郎）訳『最新精神療法』（公報社、1916）［*The Science of Psychic Healing*, 1906］
4　安東禾村『意志療法　活力増進の秘訣』（日本評論社、1922）［匿名で発表した *Anon. Vril: Vital Magnetism*, 1911 の翻訳］
5　二宮峰男『研心録』（実業之日本社、1924）［*A Series of Lessons in Raja Yoga*, 1906］
6　白石喜之助『印度哲学の精華ヨギ哲学』（新生堂、1927）
7　西村卜堂『生の源泉プラナ』（龍吟社、1928）
8　清水正光『呼吸哲学』（人文書院、1931）［*The Hindu-Yogic Sci-*

ence of Breath, 1904 他]

興味深いことに、日本でも催眠術の遺産は、アメリカと同様に、精神力を強調する治病術へと展開している。桑原俊郎『精神霊動』（開発社、1903、1904）を嚆矢として、明治末から大正にかけて、精神療法、あるいは霊術と呼ばれる治療法が多数出現している⑫。しかも、アメリカのニューソートと同様、危険術、心霊研究など、さまざまな要素がそこに結びついていき、大正中期にはアマルガムな状態となっているが、それらの精神療法家が、ラマチャラカの呼吸法や療法に注目した。たとえば、翻訳者のひとり松田霊洋は、息心調和法という呼吸法を提唱した藤田霊斎の弟子であり、『呼吸哲学』を出版した人文書院は、精神療法家、渡辺藤交の興した日本心霊学会の後身である。

しかしながら、これらの著作が翻訳されたにもかかわらず、ラマチャラカという名前は戦前は定着しなかった。それは彼の技法が実践されなかったというのではなく、むしろ、彼の名前抜きにインド哲学者の呼吸法として広く実践されたからである。たとえばオステオパシーの紹介者、山田信一は『山田式整体術講義録』全三巻（山田式整体術講習所、1920〜1921）中で、ラマチャラカの呼吸法と治療法をプラナ呼吸法、プラナ療法として紹介しているが、それらは「古くより印度で行われ来った呼吸法」とされている。また、中村天風『錬身抄』（国民教育普及会、1949）の「理想的呼吸法」はラマチャラカの呼吸法をそのまま利用している。これらに限らず、日本では、ラマチャラカの技法は、さまざまな修養法や療法に取り入れられながら、その名前も正体も知られないままに広まった。しかし、日本においても、ヨーガ呼吸法普及の原動力はラマチャラカであった⑬。

3　ババ・バラティ

先にも述べたように、松ヶ岡文庫には、少なくとも、以下のバラティ関係資料が残されており、今後の調査でさらにでてくる可能性はある。

1　1903 年 9 月 4 日付のビアトリス宛バラティ書簡。封筒なし、便箋 1 枚、表裏使用。

2　Lessons by Baba と冒頭に書かれた茶表紙のノート。1902 年 12 月

2日から1903年4月25日まで5回の講義。筆跡はビアトリスではないので、母エマか？

3　バラティの写真A。表面、無帽、長髪の肖像写真。裏面、左上に文字（ওঁ শ্রী গুরবে নমঃ か？）、その下に「To / My Chitrā / Bride of Krishna / with love and blessing / Premanand Bharati / New York, June 8, 1903」（チトラ様／クリシュナの花嫁へ／愛と祝福を込めて／プレマナンド・バラティ／1903年6月8日、ニューヨーク）。

4　バラティの写真B。表面、ターバンを巻いた肖像写真。左上に文字（ওঁ শ্রী গুরবে নমঃ か？）、画像の下に「To My Chitrā / Premanand Bharati」（チトラ様／プレマナンド・バラティ）。

5　*Light of India*, vol. 3 no. 1（1910）。バラティが編集発行していた雑誌。

この書簡の時期、母エマ・アースキン・ハーン（Emma Erskine Hahn）はスタンフォード（Stamford）に住んでいた。これはコネティカット州の地名で、ニューヨークから北東60キロ程度にある町である。母は、1902年頃よりグランジ（grange）と呼ばれる、農業、文化、政治活動に関わり、以前からあるリッポワム・グランジ（Rippowam Grange）のメンバーとなり（リッポワムはスタンフォードの古名）、自身もスタンフォードにアースキン・グランジ（Erskine Grange）という農園を営んでいた。彼女はグランジで、農業だけでなく、音楽会や読書会なども開催していたと言われる⑭。別の記事によれば、スタンフォードの丘陵にある捨てられた農園を買い取り、アンゴラ山羊の放牧を行っていた。当時のエマは社会主義者であったと評されている⑮。エマは、グランジの活動の一環として、バラティを招聘し、講義を行ったのではないかと想像されるが、その点は今後の調査を俟ちたい。

ババ・プレマナンド・バラティ（1858-1914）はヒンズー教の著述家、講演家、伝道師である⑯。彼は1902年から7年、1910年から1911年の2度アメリカに滞在している。本名はスレンドラナート・ムケルジー（Surendranath Mukherjee）、ベンガルの上流家庭に生まれた彼は、ジャーナリストになるが、1884年、ラマクリシュナのグループで宗教的回心を経験、その後12年間クリシュナ神の信仰生活に入り、聖地ラダ・クンドゥ（Radha Kund）で啓示を受け、西洋への伝道に出る。パリとロンドンを経由して1902年にアメリカに到着、ニューヨーク、ボストン、

ロサンゼルスで成功を収める。今では忘れ去られているが、*Light of India* 誌の編集発行、*Sree Krishna, the Lord of Love* の発行、アメリカ最初のクリシュナ寺院の建設を行う。学識あるヒンズー教伝道者で、ヴィヴェーカナンダに続く存在で、現代のハレ・クリシュナ運動の創始者スワミ・ブラブパーダの先駆者という位置づけである。

さて、1903年9月の頃のバラティの事績は、ほとんど知られてない。1904年夏まで、公の場での講義はないからである。つまり、松ヶ岡文庫に残る資料は、この知られざる時期に光をあてる貴重な資料であるが、それだけでなく、ヨーガ教師の意外な側面を照らしだしている。まず、その手紙の全文を紹介しておこう。

資　料

1903年9月4日付ババ・プレマナンド・バラティからビアトリス宛書簡。トランスクリプションと注はデリップ、和訳は吉永が担当した。

ওঁ শ্রী গুরবে নমঃ
oṃ śrī gurave namaḥ
Oṃ. Homage Unto the Great Guru

New York, Sept 4, 1903

My Beloved Chitrā,

I received your other letter, the one you speak of our "Zanoni," all right. I have not been able to write to you child, on account of many letters I had to write to India and in this country, as well as other very pressing engagements. I can never forget you, my sweet child. I have always thought of you, feeling you must be very unhappy somehow. I have known and I have been waiting to see you here as you said you could make a visit to New York. I see now you have not been able to do so. Will you wait for the passing of the time for my visit to Stamford till you come here and we talk over the matter to others?

I take a real and special interest in you as you are so sweet and hungering for the Lord's love. But, my dear child, you must be patient and try to be contented and happy with the things that exist for the moment around you. The Lord knows best what is good for us and it is He who puts round us things which we find disagreeable only to chasten us into greater purity. I know your life is very solitary but it is an advantage in a way. If we have real love for the spiritual, solitude is our best friend & our instructor.

Dear child! I want you to practice the mantra as much as you can and live within yourself with Krishna. Think on his Lovely Form—lovely beyond all description, beyond comparison with all that is lovely in the world—and think on His Love—Absolute Love which even a mother cannot fully feel—And if you will think on these, you will hear the music of His world-enchanting Flute by which He draws the souls of all His creatures to Himself.

I wish to give you the remainder of the lessons very much. These will help you develop the harmony in your mind of which you need so much. They'll come soon, if possible.

No trance-meeting has been held because Miss Anthon, my best medium, was busy and she left New York on Wednesday for the Coast with the "Ben Hur" company in which she plays the leading lady role. She will not be back till perhaps next May. I will have to develop another medium for the trance-meetings. My blessing to you and your good mother. May Krishna bless and keep you both.

Yours Truly,
Bharati

［和　訳］

オーム、偉大な導師をほめ讃えよ

1903年9月4日ニューヨーク

チトラ様(注1)

あなたのお手紙、まちがいなく落手いたしました。『ザノニ』(注2)についてお書きになった手紙です。インドやアメリカに書き送らないといけない手紙も多数あり、急ぎの用事もあったので、あなたにご返事できませんでした。でも、あなたのことは決して忘れていませんよ。あなたのことをずっと考えておりましたし、とても辛い思いをしているのは分かっております。あなたがニューヨークを訪問できそうだと書いていましたので、その旨了解し、こちらで待っておりました。どうもこちらにくることは出来なかったようですね。もう少し待ってもらえたら、私がスタンフォードを訪問しましょうか。あなたがこちらに来るまで待ちますか。こちらであれば、他の人とも問題をお話できるでしょう。

あなたはとても心根が優しいですし、主の愛に飢えています。それで、あなたには特別に興味があるのです。でも、忍耐強くないといけませんよ。今あなたのまわりにあるもので満足し、幸せを得るようにしてください。主は、あなたにとってよきものを最もよく知っています。私たちが不愉快だと思うものを私たちのまわりに配置し、私たちがより純粋さをもとめるように駆り立ててくれるのは主なのです。あなたの人生が孤独なのは承知しております。しかし、それはある意味利点なのです。霊的なものを本当に愛しているのなら、孤独は最良の友であり教師なのです。

どうぞ、マントラをできるだけ唱えて、あなた自身の内面でクリシュナとともに生きてください。その美しい姿を思い浮かべてください。どんな筆も及ばないような美しさ、この世の美しいものとはまったく比べ物にならない美しさ。そして、主の愛を思ってください。母親でさえ感じないような絶対の愛です。そうしたものを思うとき、主の世界の音楽が聞こえるでしょう。主が、その被造物の魂を自らに引き寄

せるときに吹く、世界を魅了する笛の音が聞こえるでしょう。

私は、講義の残りの分をあなたに教えたいと思います。それらは、あなたがとても必要としている心の調和を、あなたにもたらすでしょう。可能であれば、すぐに行いましょう。

交霊会は開かれていません。というのも、私の知ってる限り最高の霊媒であるアンソン夫人(注3)は忙しく、彼女が主役をつとめる「ベンハー」劇団(注4)と一緒に西海岸を巡業するためにニューヨークを離れるからです。ひょっとすると、来年の五月まで戻ってこないかもしれません。交霊会のために、もう一人霊媒を養成しないといけません。あなたとあなたのお母さんのために、私から祈念いたします。クリシュナのお恵みがあなた方にあらんことを。

敬具

バラティ

（注1）　このニックネームは、おそらくChitrāngadāの短縮形と思われる。これは『マハーバーラタ』に登場するアルジュナの妻の一人である。この人物を主役として、1892年タゴールの書いた戯曲“Chitrā,”では、主役は美しく同時に強い戦士ということになっている。

（注2）『ザノニ』は、1842年にブルワー＝リットンの発表した小説である。タイトルとなっている主人公ザノニは、時間を超越した薔薇十字結社の団員で、恋に落ち、人間的になり、最後は死んでいく。この作品は、19世紀後半から20世紀初め、秘教主義に興味を持つ人々には広く知られている。

（注3）　ローズ・ラインハルト・アンソン（Rose Reinhardt Anthon）は、ニューヨークの歌手、俳優。ジェラルト・カーニーによれば、バラティの「最も親しい弟子で協力者」である。1895年のヴィヴェカナンダの講演の際、彼女が歌をうたったとも言われる。この手紙の時期、彼女はニューヨークで舞台にたっていた。

（注4）　*Sunset*誌（1903年11月号）によると、サンフランシスコのグランド・オペラ・ハウスで『ベン・ハー』の公演があると告知されている。350人の俳優が参加し、舞台上で戦車レースが行われる、大規模なものであったという。

この手紙の内容であるが、前半3分の2は、ビアトリスを慰め、クリ

シュナへの信仰を勧めるなど、ヒンズー教教師の手紙としてとりたてて驚くべき内容ではない。この書簡の歴史的価値は、最後の段落にある。そこでは、ビアトリスが交霊会に関心を持っていることを思わせる記述となっている。ただし、ビアトリスが交霊会の開催を求めていたとしても、実はそれほど驚くべきことではない。20世紀初頭はボストン知識人を代表するウィリアム・ジェイムズ自身が、心霊研究にかこつけて、霊媒パイパー夫人の心霊実験を繰り返していた時期である。ジェイムズは、科学的な方法論を崩さず、比較的穏健な結論に至るのだが、彼のオブセッションは死後存続にあった⑰。死後存続の証拠や心霊現象のリアリティを求めて、あるいは近親者の霊との交流による慰撫など、人々はさまざまな理由によって霊媒に接近したのであり、今から考えるほど異常な事態ではない。むしろ、ビアトリスがなぜ交霊会の有無を問い合わせたのか、単なる好奇心なのか、あるいは、霊媒の慰撫を必要としたら、その理由はなんであったのか。それが重要な問題であるが、その点についてはここでは論じる余裕はない。

とはいえ、ビアトリスはともかく、インド人グルが、スピリチュアリズムの会合を弟子たちと定期的に開いているとなると話が異なる。ヴィヴェカナンダが「オカルティズムと神秘主義」を「気味悪いもの」と批判したように、ヨーガ教師はスピリチュアリズムと距離をおくと思われていた。まして、学識派とされるバラティがスピリチュアリズムと関わるということは、従来の研究では考えられなかった。

しかし、この点について、二つの点から考えてみたい。ひとつは一般論としてのヨーガとスピリチュアリズムの関係、第二にバラティの経歴自体の見直しである。

まず、1893年にヴィヴェーカナンダが到着する何年も前から、アメリカ大衆文化では神秘的インド像は脈々とあった。魔術師やヨーガ行者に関する途方もない話はいくつもあり、占い師もスピリチュアリストもターバンを巻き、ローブを着、インド人風の名前をつけて神秘めかすようになった。魔術的精神力、輪廻転生と死後存続、隠れたマスターとの交流といった要素もあり、ほとんどのアメリカ人にとってはインドとスピリチュアリズムは結びついたものとみなされ、その傾向は20世紀半ばまで続き、1940年代半ばになっても、ヒンズー教テーマのウィジャ盤（こっくりさん）が作られ、「ヨーガ行者の交霊会」が開催されていた。

キャサリン・オルバニーズが大著『精神と霊の共和国』⑱で述べてい

るように、メタフィジカルな求道者は、古代の知恵、隠れたマスター、秘教的力の源泉としての東洋、つまり「メタフィジカルな東洋」に漠然とした魅力を感じていた。さらに、インドの魔術は、催眠術に結びつけられて説明された。ロープ魔術がその例であるが、聴衆を催眠術にかけているだけという説明は、一方で魔術を否定すると同時に、他方で催眠術を操る精神力の驚異的な例ともなった。

当時、インドからの移民がほとんどおらず、否定する声もなかったことが、空想的なインド像に拍車をかけた。メタフィジカルな求道者たちは、インドは神秘の国であり、その出身者はすべて哲学と技法に通じているものと思いこんでいた。逆に言えば、インドからの移民は、神秘的ヨーガ行者のふりさえすれば、食べていけたわけである。

インド生まれのヨーガ教師たちが、こうした「インド像」を使い、公開講演会を行い、その中でスピリチュアリズムが論じられることは異例ではなかった。彼らはスピリチュアリズムに反対していたように思われるが、実際はよりニュアンスに富み、両者は相互に益するところがあった⑲。インド人ヨーガ教師は、ヒンズー教はスピリチュアリズムよりはるかに古く、霊の発現についてもより深い真理を伝えていると主張した。

今日とちがい、当時の「ヨーガ」という言葉は、哲学、食事、精神魔術、身体鍛錬など広い範囲をカバーするものであった。現在、歴史学者は出版物のみを主に研究対象にしているが、当時はヨーガ教師の数が出版物よりはるかに多かった。しばしば、ヨーガ教師たちは、一週間、数ヶ月あるいは数年、ある町に滞在すると、次の町へ移るという生活であった。公開講演会と印刷物によって興味を刺激し、よりプライベートなコースへと人々をさそった。教師と会員の関係は、師匠と弟子という関係から、占い師、治療者のような専門家と依頼者という関係までさまざまであった。

このように様々なレベル（公共的、私的、一対一）があり、内的なレベルの関係が外的なレベルで偽装されている場合もあった。証明できる範囲で言えば、20世紀初頭のヨーガ教師は、公共の場では立派な用語をつかい、ヨーガ哲学と実践について述べたが、しかしプライヴェートなコースでは、さまざまな秘教的な教えが特に選ばれた生徒だけに伝えられた。公共圏でスピリチュアリズムが嫌悪されていること、占いが犯罪として告発されることなどを考えると、このように隠すことは明らかな実践的利益があった。ヨーガはたいへん広い内容を含み、ヨーガ教師

のネットワークや組織の階層、そして生徒側のさまざまな関心があった。このように考えてみると、バラティが本や講演で言及しているのとかなり異なる実践、つまり交霊会を、生徒たちの内輪のサークルで行っていたことは不思議ではない。

次に、以上を念頭において、ババ・バラティの講演会と彼の周辺の人物を見直してみよう。バラティは、実は何度かにわたってスピリチュアリズムとの関わりがあった。カリフォルニアに初めて到着した時、「インドでの心霊研究」について講演し、さらに別の日には「心霊問題に関わる質問に答えた」という[20]。また彼はイギリス生まれの手品師で、1890年代「心理手品」を演しものとした、アレクサンダー・マッキーバー・ティンドール（Alexander McIvor-Tyndall）とつながりがあった。ティンドールはのちに1910年代末、スピリチュアリズムの牧師となるが、それまでの間、ニューソートと精神療法を講義しながら、「精神力のデモンストレーション」として手品を披露していた。二人は、1905年、同じロサンゼルスのブランチャード・ホールで講演した際に出会い、同じメタフィジカル系の人脈に属していた。バラティは、少なくとも二回、マッキーバー・ティンドールの雑誌『スワスティカ』（*Swastika*）に、記事を寄稿し、同誌はバラティの出版広告を全面頁で掲載していた。

ババ・バラティとスピリチュアリズムの関係は、ビアトリスに書いた手紙だけでなく、1911年、カリフォルニア大学バークリー校で起きた事件でさらにはっきりする。この時、ライ・モハン・デュット（Rai Mohan Dutt）率いるインド人学生が、バラティの講演を妨害し新聞記事になっているのである。 学生たちは、バラティが講演の最後に女性ヨーガ行者ガネーシャ（Yogini Ganesa）の広告カードを配るのに反対し、その女性と一緒に住んでいることを批判したのである。デュットは、ガネーシャがオークランドについた早々彼女に会い、彼女の手相占いを見て、インド人でないと分かったと言う。面白いことに、インド人 学生たちは、ガネーシャ、バラティを「二人とも詐欺師だ」と非難している[21]。ガネーシャは、その後の新聞記事で自分とバラティを弁護したのだが、かえって二人が熟知の仲であり、二人がそろって会場に現れたのは偶然でもなんでもないことを暴露してしまった[22]。

ガネーシャの前歴は不明であるが、記録によると彼女はアフリカ系アメリカ人[23]で、シュリトクティ・L・ラ・バードラ（Schlytocty L. La Birdla）などと名乗り、 ラ・バードラ・シップ（La Birdla Shipp）名で、デ

ンバーで1902年から1905年まで「キリスト教スピリチュアリスト・クラブ」を主催していた。そして、1905年から1909年までの間に、アリゾナから南カリフォルニアに移り、しばらくサン・バーナディーノで「統一の神秘的寺院」を結成した後、ロサンゼルスに移る。この5年前の1906年、当時、心理手品師、トリップ教授（Professor Trip）と称したガネーシャとババ・バラティは、ともにロサンゼルスのダウンタウンで講演をしていた時期があり、この時に知り合った可能性がある㉔。中西部から西海岸に移る間に、「キリスト教スピリチュアリスト」であった彼女は次第に東洋化し、ヒンズー・スタイルのドレスを身につけ、「ヒンズーの精神集中法」を教えるようになった。カリフォルニアのベイエリアに移るまでには、「プリンセス・ガネーシャ」を称するようになっていた。1909年秋、彼女の求婚者の一人が自殺した後、「サン・フランシスコ・クロニクル」紙は、占師の営業資格がないと暴露した。1910年、彼女はサンフランシスコのエンジェル島に到着する南アジア移民の代弁者を自称するようになり、彼女が勝手に作ったと思われる「国際ヒンズー協会」（International Hindoo Association）の会長になっている。バラティの講演中断事件の後、宗教的講演者にスタイルを変え、1911年夏、オークランドに「哲学ヨーガ学校」なるものを設立し、占いとスピリチュアリズムは、裏に隠している。同学校の記録が残るのは1911年末までで、その後はプリンセス・ガネーシャやラ・バードラ・シップの名前は消えている。

以上のように、ビアトリスへの手紙、ならびにプリンセス・ガネーシャの関係という新事実から、プレマナンダ・ババ・バラティの再研究が迫られていると言えよう。ビアトリスへの手紙は彼がアメリカを訪問した初期に書かれており、ガネーシャとの関係は二度目のアメリカ滞在を終える直前であった。その間もスピリチュアリストとの邂逅はあり、ほぼ十年間に及ぶ彼の伝道生活において、バラティはスピリチュアリズムに関わり続けたことになる。バラティと出会う前、あるいはその間、そしてバラティと離れた後も、多くの彼の生徒たちはスピリチュアリズムに関係を保ち続けた。たとえば手紙の中にでてくるローズ・アンソンであり、あるいは1934年になって『スクウェア』（*Square*）という題名の心霊通信を出版したモード・ラティア（Maud Latia）がいる。その本はバラティに捧げられていた。

アジアからの宗教指導者が、アメリカ滞在中にアメリカ人に影響を及

ぼしたと単純に考えるのは一般的ではあるが、生徒や聴衆に影響を与えたと同時に影響を受けた、つまり、彼らの見方や期待に適合しようとしたと考える方が公平であろう。バラティは、彼の仲間たちから用語を借用している。たとえば、ウィリアム・ウォーカー・アトキンソンから「思考の力」、マッキーバー・ティンドールから「宇宙意識」という用語を借用している。このことは、バラティが既製のメッセージを東洋から西洋へと伝えた伝道師というだけではなく、聴衆と生徒たちの市場の動向に注意深いスピリチュアルな商人という世俗的な側面も意味している。すでに述べたように、ドゥブニーは、19世紀終わりから20世紀初めにかけて「スピリチュアリズム、オカルティズム、メスメリズム、錬金術、魔術、神智学、東洋宗教」の伝統や歴史は、別々に存在していたと考えるよりも、相互に融合しあい複雑で一つに編み上げられた全体を構成していると考えるべきではないかと主張し、メタフィジカルな「アマルガム」という用語を提唱している。バラティからビアトリスへの手紙、そしてヒンズー教伝道師とスピリチュアリズムの関係は、メタフィジカルな「アマルガム」を立証しているように思われる。

おわりに

アメリカにおけるヨーガと仏教のその後の歴史を比較してみよう。20世紀初頭、ニューソート・アマルガムが全盛に向かい、ラマチャラカの著作が盛んに出版されていた頃、仏教は第一次ブームが終焉を迎えている。トマス・ツイードは、その『アメリカ人の仏教との出会い』において、仏教ブームの隆盛と終焉を、メイン・カルチャーとの逸脱と同化から説明している㉙。簡単に言えば、ある程度、メインカルチャーと異なっていないと流行せず、異なり過ぎていても流行しないということである。仏教の場合、ペシミズムという印象を拭うことができず、よりポジティブになっていくアメリカのメイン・カルチャーから離れすぎたことが、第一次流行終焉の原因ではなかったかとツイードは推測している。その理論を敷衍すれば、ニューソート・アマルガムは、積極性、楽天主義などメイン・カルチャーと価値観を共有していたから20世紀前半に大流行したのであり、その一部に組み込まれていたヨーガは、移民法による制限も被りながらも、また、かなり大衆的想像力に歪められた形で

あっても、その後も途絶えることなくアメリカ社会で存在を誇示し続けていったのであろう。日本仏教であっても、ニューソート・アマルガム的な文化から超然としていたわけではない[26]が、ヨーガほどの大衆文化との関わりはなかった。

このように考えてみれば、仏教がすでに退潮しつつあった時期、神智学やスウェーデンボルグ主義に頼ることなく、その宗教的意義を改めて主張した鈴木大拙の『大乗仏教概論』*Outlines of Mahayana Buddhism*（Luzac, 1907）の功績は大きい。この『概論』に影響され、そしてビアトリスの日本仏教への参入に刺激されて、別稿で紹介したM・T・カービーやW・M・マクガヴァンは日本仏教に帰依し得度したわけである。大拙の示した「大乗仏教」は、「似て非なる仏教」から一歩踏み出して、仏教モダニズムと呼ばれるようになる、世界に通用する新しい仏教への道筋を示していた。しかし、カービーの失望が示すように、日本の寺院仏教は必ずしも世界に通用するような理想的な環境ではなかった。実践のレベルを含めての寺院仏教の近代化は、さらに時間を要することになる。

とはいえ、寺院を離れてみれば、すでに1910年代の日本には、脱文脈化した仏教技法は盛んに実践されていた。すでに大拙自身が『静坐のすすめ』（光融館、1899）で精神修養法としての禅を提唱し、大拙と同じく新仏教運動の同人であった加藤咄堂の『冥想論』（東亜堂、1905）、『修養論』（東亜堂、1909）も宗教を離れた修養を提唱している。さらに、岡田虎二郎の岡田式静坐法、藤田霊斎の息心調和法など、心身の健康法であると同時に、それを超えた一種の宗教性の漂う修養が明治40年前後から流行しはじめている。このような日本における心身修養の興隆は、スリランカにおけるダルマパーラの瞑想法の復興[27]、ビルマでのレディ・サヤドーによる瞑想法の普及、インドにおけるヨーガ呼吸法の流行[28]など、アジア地域での伝統技法の近代化、大衆化とも時期を同じくしている。さらに19世紀末から20世紀前半にかけて、アメリカのニューソート、日本の精神療法や霊術のように、催眠術を起点とするさまざまな心身技法が発達していることを考え併せれば、現代のヨーガ流行へつながる宗教の地殻変動は、この時期、世界各地で同時多発的に起こっていたわけである。

注

① 伊藤雅之「現代ヨーガの系譜—スピリチュアリティ文化との融合に着目して—」『宗教研究』84巻4輯（2011）418頁。

② 忽滑谷快天『養気錬心乃実験』（東亜堂、1913）4頁。

③ 近代仏教と神智学の交流については、吉永進一「似て非なる他者」、末木他編『ブッダの変貌』（法蔵館、2014）を参照せよ。

④ 忽滑谷、前掲書、7頁。

⑤ 忽滑谷、前掲書、9頁。

⑥ 鈴木大拙全集19巻（岩波書店、2001）439頁。初出は、「欧米における仏教思想の伝播(一)～(六)」、1923年11月22、23、25、27、28、29日『中外日報』掲載。

⑦ 鈴木大拙全集19巻、438頁。

⑧ John Patrick Deveney, "Man is a Spirit Here and Now: The Two Faces of Nineteenth-Century Spiritualism and the Creation of the Magical Occult Theosophical Spiritualist New Thought Amalgam," in *Handbook of Spiritualism and Channeling*, Cathy Gutierrez ed., (Leiden: Brill, 2015), pp. 139-151.

⑨ John Patrick Deveney, op.cit., p. 134.

⑩ 以下の内容は Philip Deslippe, Introduction to *The Kybalion The Definitive Edition* (Penguin, 2011)、Philip Deslippe, "William Walker Atkinson as Yogi Ramacharaka: Physical Culture, Metaphysical Tradition, and Cultural Influence"（佐藤清子訳「ウィリアム・ウォーカー・アトキンソン、別名ヨギ・ラマチャラカ」（仮題）として論集『近代化された〈気〉』〈せりか書房〉近刊予定に掲載）を要約した。詳しくは同書を参照のこと。

⑪ セルゲイ・チェルカッスキー、堀江新二訳『スタニスラフスキーとヨーガ』（未来社、2015）参照。

⑫ 井村宏次『霊術家の饗宴』（心交社、1984）を参照せよ。濱口熊嶽の密教、桑原俊郎の精神療法、香具師の危険術など、宗教、科学から見世物まで、さまざま文化が吸収されていたことがわかる。

⑬ 吉永進一「民間精神療法の時代」、『日本人の身・心・霊』第1期8巻（クレス出版、2004年）所収を参照のこと。

⑭ この項、ウェイン横山氏のご教示による。2015年9月19日付け吉永宛メール。

⑮ Elisa H. "Craftswoman In Agriculture". Craftsman. 1906 Aug; Vol. 10,

(No. 5). pp. 630-637 http://www.stamfordhistory.org/b_b.htm による。

⑯ バラティについては、Gerald T. Carney, "Baba Premananada Bharati (1957-1914), An Early Twentieth-Century Encounter of Vaisnava Devotion with American Culture" A Comparative Study," *Journal of Vaisnava Studies* (Spring 1998), pp. 161-188、ならびに Carney による、Bharati, *Sri Krsna: The Lord of Love* (Blazing Sapphire Press, 2007) の序文を参照のこと。

⑰ 吉永進一「ウィリアム・ジェイムズの心霊研究」『宗教哲学研究』7号（1990年）。

⑱ Catherine Albanese, *A Republic of Mind and Spirit* (New Haven: Yale University Press, 2007).

⑲ これについては David Walker, "The Humbug in American Religion: Ritual Theories of Nineteenth-Century Spiritualism," *Religion and American Culture*, Volume 23, Number 1, (Winter 2013), pp. 30-74. を参照。

⑳ "Venice. Oratorio Pleases Them," *Los Angeles Times*, August 15, 1905; "Venice," *Los Angeles Times*, August 18, 1905.

㉑ "'Princess?' Not Much, Say Bold Men of India," *Oakland Tribune*, May 4, 1911.

㉒ "Indian Princess Defends Swami," *Oakland Tribune*, May 5, 1911.

㉓ アフリカ系アメリカ人がインド人を偽装することは、当時の過酷な人種差別を免れる手段でもあり、インド人グルを偽装したのは彼女だけではなかった。さらに、「神秘的インド像」への憧憬から、アフリカ系魔術宗教文化フードゥーではインド的シンボルを盛んに使うようになった。より詳しくは Philip Deslippe, The Hindu in Hoodoo: Fake Yogis, Pseudo-Swamis, and the Manufacture of African American Folk Magic, in *Amerasia Journal* 40:1 (2014) を参照のこと。

㉔ Display Ads, *Los Angeles Herald*, March 11, 1906.

㉕ Thomas A. Tweed, *The American Encounter with Buddhism 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1992)

㉖ 20世紀初頭、サンフランシスコやサクラメントなどの西本願寺系の仏教寺院に関係していたマッチニアナンダ（Mazzinianda）なる人物がいる。Re-incarnation, a necessity という記事を *Light of Dharma*, vol. 5 no. 3 (Dec., 1907) に寄稿し、*Open Court* vol. 26 issue. 2 (Feb, 1912) は、巻頭記事 A Buddhist Prelate of California で彼を紹介してい

るなど、仏教関係者には認められた人物であったが、その経歴は、イランのパーシ教徒として生まれ、ラサでダライ・ラマに仏教を学び、オックスフォード、ハイデルベルグ、パリで多数の学位を取得したという信じられないものであった。しかし、これらの記事以前、1907年1月、ライセンスを得ずに交霊会を行ったためにロサンゼルスで逮捕されている。裁判の際、彼が主張するように東洋系かどうかを確証するために呼ばれた証人がバラティであった。バラティを前にしてマッチニアナンダは、英語以外は知らないことを認めたという（LA Herald紙1907年1月4日）。この事件はサンフランシスコ、あるいはサクラメントまでは伝わってなかったのか、日本側開教使はしばらく彼を信用して関係を続けていたようである。

㉗ Steven Kemper, *Rescued from the Nation* (Chicago University Press, 2015) によれば、ダルマパーラが仏教復興運動に乗り出した時、瞑想を実践している僧侶はほとんどおらず、苦労して師匠を探したという。当時のスリランカ仏教で瞑想法が実践されていなかったことは、同地に留学した釈宗演も証言している。

㉘ Nile Green, "Breathing in India, c. 1890" *Modern Asian Studies* vol. 42 double issue. 2-3 (2008) を参照。十九世紀末の植民地インドでのヨーギとスーフィーによる呼吸法本流行は、その雑多性、折衷性、大衆性において、ドゥブニーの指摘するニューソート・アマルガム、あるいは日本の精神療法流行に酷似している。

公益財団法人 松ヶ岡文庫研究年報

第 30 号

2 0 1 6

〈目次〉

『公益財団法人松ヶ岡文庫研究年報』第三十号刊行にあたって …… 3

仙厓序論［別の取り組み］……鈴 木 大 拙 5

松ヶ岡文庫に収蔵された *Mahayanist* 誌について……吉 永 進 一 63

鈴木大拙英文書簡〔日本語訳〕…… 77

公益財団法人松ヶ岡文庫 大拙先生九十六年の歩みを顧みて（その二）
……伴 勝 代 111

大用国師 二百年遠忌記念 『誠拙禅師語録』翻刻 ……鈴 木 省 訓 175

ヨーガとニューソート——松ヶ岡文庫未整理資料より発見された
バラティの手紙をめぐって……吉永進一・フィリップ・デリッ[redacted]

D. T. Suzuki's English Letters ……[redacted]

D. T. Suzuki in Transition 1949–53 …… James C, D[redacted]

Introduction to Sengai [Another Approach]…… Daisetz T. [redacted]

公益財団法人

松 ヶ 岡 文 庫

鎌倉市山ノ内

公益財団法人松ヶ岡文庫研究年報

第三十号

THE ANNUAL REPORT OF RESEARCHES OF THE PUBLIC INTEREST MATSUGAOKA BUNKO FOUNDATION

No. 30 2016

CONTENTS

blishing of *The Annual Report of Researches The Matsugaoka Bunko* No. 30 3

uction to Sengai [Another Approach] (Japanese translation) ..... *Daisetz T. Suzuki* 5

ayanist, an English-language Journal of Buddhism, atsugaoka Bunko ..... *Shinichi Yoshinaga* 63

uzuki's English Letters (Japanese translation) 77

spect of the Eventful Ninety Six Years of D. T. Suzuki's Life he Matsugaoka Bunko Foundation II ..... *Katsuyo Ban* 111

Zenji-Goroku (reprinting) III ..... *Shōkun Suzuki* 175

New Thought: An Essay on a letter nanda Baba Bharati unearthed in Matsugaoka Bunko ..... *Shinichi Yoshinaga & Philip Deslippe* *93*

ki's English Letters *63*

ki in Transition 1949–53 ..... *James C. Dobbins* *47*

n to Sengai [Another Approach] ..... *Daisetz T. Suzuki* *1*

BLIC INTEREST MATSUGAOKA BUNKO FOUNDATION
(THE PINE HILL LIBRARY)
KAMAKURA, JAPAN

公益財団法人松ヶ岡文庫